

## 第一、第二ラテラノ公会議

関 口 武 彦

(教育学部 歴史学研究室)

改革教皇権の登場までにすでに七つの公会議が一般に公認されていた。レオ九世は宗派にかかわらず尊重されている四つの公会議（ニカイア・コンスタンティノープル・エフェソス・カルケドン）に言及したあとで、第二ニカイア公会議（七八七年）にいたる「七つの聖なる普遍公会議」《*septem sancta et universalia concilia*》について述べている。<sup>①</sup>レオの特使フンベルトウス（シルヴァ・カンディダの司教枢機卿）がコンスタンティノープル総主教ミカエル・ケルラリオスを破門したとき、彼は「七つの公会議の正統的教父たちの権威に基づいて」《*auctoritate orthodoxorum Patrum ex conciliis septem*》そうしたのである。<sup>②</sup>第八回公会議（第四コンスタンティノープル公会議）は東西教会の分岐点をなしている。フォティオス問題について審議した当会議を西方教会が普遍公会議として認めたのは教皇改革期になってからであり、その主唱者は教会法学者のシャルトル司教イヴであった。<sup>③</sup>東方教会は当会議を普遍公会議として認めていない。一方、西方教会は十二世紀になってこれを公会議として承認するようになり、グラティアヌスもまた『教令集』において「八つの聖な

る普遍公会議」《*sancta octo universalia concilia*》の中に位置づけたのである。<sup>④</sup>第一、第二ラテラノ公会議が普遍公会議として公認された正確な時期については残念ながら不明である。おそらく中世後期であろう。コンスタンツ公会議の第三十九会議（一四〇七年一〇月）における教皇の信仰宣言の中で、八つの普遍公会議と並んで四つのラテラノ公会議、二つのリヨン公会議、そしてヴィエンヌ公会議が正式に言及された。<sup>⑤</sup>

公会議史上、第一ラテラノ公会議は重要な位置を占めている。<sup>⑥</sup>普遍公会議としては九番目にあたる。それ以前の八つの公会議はすべてビザンツ皇帝が召集し、東方の諸都市で開催された。教皇は代理を派遣したことはあったが、みずからは一度も出席していない。教皇が召集し、西欧で開催された公会議は一一二三年の第一ラテラノ公会議をもって嚆矢とする。十字軍が派遣され、レヴァントに十字軍国家が建設されたこの時代は、西方世界とビザンツ帝国との力のバランスが微妙に変化し始めたときにあたる。西欧では皇帝権と教皇権とのあいだに政教条約が結ばれて、改革教皇権の意気が揚がっていた時代である。第一ラテラノ公会議

を皮切りに、一世紀足らずのあいだに四回の公会議がラテラノ聖堂で開催された。平均して四半世紀に一回の開催である。公会議の準備と運営は教皇に多大な精神的、肉体的負担をもたらした。公会議終了後の教皇の平均余命は二年半弱であり、五年を越えて生存した教皇はいない。

本稿では、教皇改革の後半に開催された二つの公会議を取り上げて、改革史上の意義を明らかにしようとするものである。

## 一 教皇改革と教会会議

十一世紀後半から十二世紀にかけて教皇主宰の教会会議が頻繁に開催された。<sup>(7)</sup> 教皇が近郊教区の聖職者を集めて開いた教会会議は一般にシノドゥス *synodus* と呼ばれ、その主たる目的は訴訟の審理にあった。教皇改革期には通常、四旬節と秋季にローマで教会会議が開催されたが、教皇が西欧各地を歴訪する機会が増えるにつれて、訪問先の司教座教会でもしくは重要な裁判集会がもたれている。しかし改革の進展に伴って教会会議の性格もまた変化した。ウルバヌス二世は十一年間の在任中に十一回の教会会議を開催したが、このうち八回はローマ以外の都市で開催された。教皇は同一のカノンを繰り返し布告するようになり、教会会議での教皇のイニシアチブは増大した。伝統的な立法・裁判集会としての性格は薄れ、教会会議は教皇の意思を伝達し、彼の政策に同意と承認

をあたえる機関へと変質した。出席者は事前に用意されたカノンにたいして賛成 (*placet, fiat*) の意思表示をするだけになったのである。ウルバヌス二世以後、立法・裁判集会としてのシノドゥスは次第にコンキリウム *concilium* なる名称に取って代わられた。<sup>(8)</sup> コンキリウムは元来皇帝が召集し、彼またはその代理が主宰した教会会議を意味した用語である。コンキリウムが教会会議の一般的用語として定着するのはカリクストゥス二世以後である。訴訟の審理・裁決は新たに形成された枢機卿会議 *consistorium* に委ねられ、専門的調査を要する重要案件については、教皇は特別の調査委員会を設けてここで審理させた。参列者が広域に跨るときには、教会会議は総教会会議 (*concilium generale*) と呼ばれた。十二世紀には七つの教会会議がこの名で呼ばれている。ランス (一一一九年)、第一ラテラノ (一一一三年)、ランス (一一二二年)、ピサ (一一三五年)、第二ラテラノ (一一三九年)、ランス (一一四八年)、そして第三ラテラノ (一一七九年) の諸会議がこれである。<sup>(9)</sup>

カリクストゥス二世が召集したランス教会会議 (一一一九年一〇月) は参列者によるルポルタージュが残されている数少ない教会会議の一つである。<sup>(10)</sup> 当会議にはイタリア、フランス、スペイン、ドイツ、イギリスから十五名の大司教、二百名以上の司教が参列した。このほかに三百名以上の聖職者・俗人が出席している。会議の規模からいっても公会議に近かったと言わねばならない。オルデリック・ヴィターリスは座席の配

列について記しているが、これは改革教皇権下の上意下達の態様を知る上で参考になろう。会場になった大司教座聖堂の西方入口の扉の前に一段と高い教皇の玉座が設けられた。教皇の傍らにはダルマチカを着た尚書院長グリソグヌス（サンタリニコラの助祭枢機卿）が教会法書を手にして立っていた。教皇座をぐるりと取り囲んで十名前後の枢機卿が東面して着座し、ときどき参列者に向って静肅を命じた。西面する参列者の最前列には大司教が座を占め、その数はおよそ十五名であった。その席順も大司教座の由緒・格式に応じてあらかじめ定められていた。その後には約二百名の司教が控え、そのうしろには三百名を超える聖職者・俗人の席があった。つまり会議を主宰するスタッフ（教皇・枢機卿団）とそれ以外の聖職者の席が明確に区別されたのである。当会議の最大のボレーミクは、クリュニー修道院長ボンスとリヨン大司教フンバルドゥスのあいだの免属をめぐる争いであった。<sup>(11)</sup> サン・グリソゴノの司祭枢機卿ヨハネスがボンスを支持する判決文を朗読すると会場には不満の声が漏れたという。当会議はハインリヒ五世に破門を宣告したあとで閉会したが、この会議の最大の勝者はいうまでもなく教皇であった。ヨハネスはその判決文の中で聖ペトロの繋釈権についての周知の聖句（マタイ一六・一八―一九）を引用しつつ、使徒座は「全教会のかなめにして頭」《cardo et caput omnium ecclesiarum》であり、肢体《membra》は頭《caput》に服従しなければならぬと主張したのである。<sup>(12)</sup>

ランス教会会議の開催中にムゾンにおいて教皇と皇帝の会見が予定されていたが、双方の不信のためにこれは実現しなかった。一二〇年六月、カリクストゥス二世はローマ入城を果たした。お膳立てをしたのはローマの貴族ピエレオーニ家出身の枢機卿ペトルス・レオーニスである。白馬に跨がり、金銀の刺繍をした豪華な衣装を身につけた教皇の勇姿は教皇史の新たな頁の始まりを象徴していた。一二二一年四月にはストリが奪回されて「ドイツ人の王の偶像」《Teutonicorum regis idolum》とみなされていたブルディヌス（対立教皇グレゴリウス八世）が捕虜になった。<sup>(13)</sup> 同年九月にヴュルツブルクで開催された諸侯会議は和平達成のために皇帝に努力を促した。一二二二年二月にカリクストゥス二世はハインリヒ五世に書簡を送り、平和の回復が急務であると血縁の誼みに訴えて主張した。「あなたに属することを似つかわしく行うことができま

すように、あなたの務めに属さないものを放棄なさって下さい。教会はキリストに属するものを保持し、皇帝は彼に属するものを所有すべきです」<sup>(14)</sup>と。和平達成の見通しに確信をもった教皇は同年六月に公会議の召集令状を西欧各地の高位聖職者に発給し、来年の四旬節第四主日までにローマに到着するように伝えた。<sup>(15)</sup> ウォルムス協約はこの三ヶ月後に締結され、翌年三月にラテラノ公会議が開催されたのである。

## 二 第一ラテラノ公会議

第一ラテラノ公会議は一一二三年三月一日に開会し、十日後の三月二七日に閉会した。<sup>(16)</sup> 公会議の議事録や出席者名簿は残されていないが、これは第二ラテラノ公会議についても同じである。シュジェールによると三百人以上の司教が出席したという。<sup>(17)</sup> 当会議においてウォルムス協約が承認された。公会議開催中に叙階式や列聖式が行われるのが慣例であり、当会議でもブレーメン・ハンプルク大司教アダルベロの叙階式が行われ、またコンスタンツ司教コンラートが列聖された。祝典は会議をもりたてる一つの方法でもあった。当会議の最大の懸案はコルシカ教会の裁治権をめぐるピサ、ジェノヴァ両教会の争いである。これについてはジェノヴァ人カツファルスの詳細な報告が残されている。<sup>(18)</sup> カリクストウスは裁治権問題に決着をつけるために、二十四名の判事*iudices*（大司教・司教のそれぞれから十二名）で構成される調査委員会を設置し、委員長にはラヴェンナ大司教ガアルテリウスを任命した。ローマ教会の古文書を精査した結果、ピサ人がコルシカ教会にたいして行使していた権利には正当な根拠のないことが判明した。三百名を超える高位聖職者が参列した一般集会において、ガアルテリウスは「ピサ大司教は以後コルシカの聖別権を放棄し、今後は聖別権を断念すべきである」とする決議文を朗読した。このあとで教皇は参列していた高位聖職者に決議文について

の賛否を問うた。一同は三度「賛成」(*placeo*)を唱えたので、教皇は翌日の総会《*pleno concilio*》に本決議文を上程すると告げた。ピサ大司教とその属司教は怒りのあまり司教冠と司教指環を教皇の足もとに放り投げて言ったという。「以後私はあなたの大司教でもなければ司教でもありません」。教皇は司教冠と司教指環を押しつけてからピサ大司教に語った。「兄弟よ、あなたは罪を犯しました。すぐに贖罪を果たさなくてはなりません」。翌日の総会において教皇は判決文を枢機卿グレゴリウス（サン・リタンジェロの助祭枢機卿で後のインノケンティウス二世）に朗読させ、全出席者の承認を得た。判決が宣告された直後に、ピサ人たちは教皇の許可を得ないでローマを立ち去ったという。しかしながらコルシカ教会の裁治権問題はこれによって解決したわけではなく、その後も長くくすぶり続けた。<sup>(19)</sup> 最終的に決着したのはインノケンティウス二世がコルシカ教会の裁治権を南北に二分し、それぞれをピサ大司教とジェノヴァ大司教に帰属させたことによつてである。<sup>(20)</sup>

当公会議からは総数十七条のカノンが知られている。<sup>(21)</sup> シモニア、俗人叙任、そしてニコライズムの禁止（第一、三、七条）は一一一九年のランス教会会議のカノンの繰返しである。品級と役職の一致（第六条）は聖職者の改革に関する規定である。さらに司教権の強化に関するカノンがある。教区司教の懲戒権の絶対性（第二条）、教会とその所領の管理責任者としての司教の地位の明確化（第八条）がこれである。ランス教

公会議ではクリュニーの免属にたいする司教団の敵意が関心を集めたが、当公会議でもモンテカッシーノの免属が司教団の攻撃にさらされた。とくに注目すべきは第四条と第十六条の規定である。第四条は在俗教会における司教権の優位を規定した。「大助祭、大司祭、聖堂参事会長、司祭長は司牧権や教会の聖職禄を司教の判断あるいは同意なしに他の者に与えてはならない。さらに聖なるカノンが定めているように司牧権および教会財の管理は司教の判断と権力のうちにある。もしも誰かがこの規定に違反したり、司教に属する権力をおのれのために要求するならば、彼は教会の敷居から遠ざけられねばならない」<sup>(22)</sup>。第十六条は律修教会における司教権の優位を規定している。「さらに我々は聖なる教父たちの足跡に倣いつつ、一般的決議として次のごとく規定する。修道士は彼の教区司教に能うかぎりの謙遜の心をもって服従すべきであり、神の教会の指導者や司牧者にたいして行うように、万事にふさわしい服従と献身的な従順を示さなくてはならない。修道士は何処においても公誦ミサを司式してはならない。修道士はおのれの務めに属さない病人の見舞い、終油および悔悛の秘跡の授与をやめるべきである。また修道士の管理が認められている教会では、修道士は彼の教区司教の手で叙階された司祭だけを受け入れるべきであり、司祭は彼が引き受けた司牧については司教に責任を負わなくてはならない」<sup>(23)</sup>。本条はカルケドン公会議のカノン第四条の再確認である。第四条と第十六条はワンセットになって在俗・律修

教会における司教権の優位と司教の司牧責任を明示したものだ。<sup>(24)</sup>これは十二世紀を通じて異端運動に直面した教会がつねに立ち戻るべき原則になるであろう。

家族および社会のモラルの改善を意図したカノンもある。近親結婚の弊害（第九条）、門前居住民 *Porticani* の財産の保全（第十一条）、教会の奉献物を俗人が私有することの禁止（第十二条）、鑄貨偽造の禁止（第十三条）、ローマの参詣者・巡礼者の保護（第十四条）、神の平和・神の休戦の遵守（第十五条）などがこれである。さらに本会議で初めて十字軍兵士の誓願の解消不能性が公的に宣言された。出征者には免償が与えられ、彼の家族・財産は聖座の保護の下におかれた。エルサレムであれスペインであれ、いったん出征の誓願を立てた者は、今年の復活祭から来年の復活祭までのあいだに出發しなければならない（第十条）。権力のバランスの変化を示唆したカノンもみられる。北上するノルマン人によつて教皇領の都市ベネヴェントが脅威にさらされていると指摘している（第十七条）。すでにカリクストゥス二世は一一二一年九月に南伊のカラブリアを訪れてルッジェーロ二世にアブリア侵略をやめるように警告した。<sup>(25)</sup> 教皇のカラブリア訪問は対ノルマン人政策の転機をなすものであり、これ以後教皇に皇帝との和平を急がせることになった。これはまたカリクストゥス二世の枢機卿政策にも大きな影響を及ぼした。一一二三年までにカリクストゥスは十六名の枢機卿を任命した。新枢機卿の大

多数は北伊・フランスの出身者によって占められ、ルッジエーロ二世との同盟を重視するローマ・南伊出身の枢機卿を牽制するかのとき観を呈したのである。<sup>(26)</sup>当公会議は対立教皇ブルディヌスを異端者 *haeresiarcha* と呼び、彼および彼が叙任した司教による叙階は無効であると述べている（第五条）しかしながら異端運動に直接言及したカノンは知られていない。カリクストゥス二世下のトゥルーズ教会会議（一一一九年七月）はカノン第三条でピエール・ド・ブリュイの異端を排斥し断罪したが、<sup>(27)</sup>十二世紀第一・四半期には異端運動はまだ深刻な社会問題になっていない。司教が司牧責任を自覚してそれを良心的に果たすことによって（第四、十六条）、異端に対処できると当局は考えていたのである。

カリクストゥス二世を継いだホノリウス二世が死去すると教会はシスマに襲われた。一一三〇年のシスマがこれである。私は以前に主としてクレーヴィッツとシュマールレの研究に拠りながら、本シスマについて考察したことがある。<sup>(28)</sup>シュマールレの研究が公表されてからすでに半世紀が経過し、この間にP・クラッセン、W・マレツェク、T・ロイターなどによる批判が相次いだ。<sup>(29)</sup>シュマールレの研究は部分的な修正をせまられたが、クレーヴィッツ・シュマールレの基本的主張、すなわちシスマの起源は皇帝、ローマ貴族といった外部の勢力によるものではなくて、枢機卿団内部の党派抗争にあるとするテーゼは依然として健在である。<sup>(30)</sup>カリク

ストゥス二世、ホノリウス二世によって任命された北伊・フランス出身の枢機卿の大多数はインノケンティウス二世を支持し、聖ペトロ世襲領の南部および南伊出身の枢機卿の多くはアナクレトゥス二世を支持した。前者の枢機卿グループは枢機卿会の比較的新しいメンバーから成り、後者のグループには古参のメンバーが多かったことは注目されよう。枢機卿党派の対照的な性格は、実はシスマの勃発後になっていっそう顕著になる。インノケンティウスは西欧諸国の聖俗界の要人の支持をとりつけることが先決であると判断して、アルプス以北で積極的な政界工作に乗り出した。かくてシスマ勃発から一年をへないで、フランス、帝国、イギリスの王の支持をとりつけることができたのである。これに対してアナクレトゥスはローマの支配こそが正統教皇として認知されるための不可欠な条件と考えて、ローマ掌握に全力を尽くした。一族ピエルレオーニ家の協力を得て、インノケンティウスを支持していたフランジバーニ家を買収して味方につけ、サンルビエトロ、ラテラノ両聖堂を占領してローマを完全に制圧した。<sup>(31)</sup>アナクレトゥスは、帝国にはついに自派の教皇特使を派遣しなかった。他方、インノケンティウスはドイツの事情に通じた枢機卿特使ゲラルドゥス（後の教皇ルキウス二世）を派遣して政界工作を行わせている。いずれの教皇を支持するかをめぐって論議したヴュルツブルクの諸侯会議（一一三〇年一〇月）では、アナクレトゥスはインノケンティウス派のザルツブルク大司教コンラート、マゲデブ

ルク大司教ノルベルトらが会議をリードするのに任せたのである。<sup>(32)</sup> アナクレトウスが積極的に働きかけたのはシチリアのルッジェーロ二世であった。一一三〇年九月二七日に同教皇はルッジェーロの王位昇格を承認し、カプア、ナポリを王国に合体させた。<sup>(33)</sup> 同年十二月二五日にはパレルモでルッジェーロの戴冠式を挙行した。アナクレトウスは皇帝の敵と同盟を結ぶことによって帝国を放棄したといえよう。<sup>(34)</sup> 両教皇の政策上の相違はそれぞれの枢機卿政策にもあらわれている。インノケンティウスは在任中に五十名の枢機卿を任命したが、その大部分はローマ以北のイタリアおよびフランスの出身であった。他方、アナクレトウスは在任中に十七名の枢機卿を任命した。その大多数はローマ、ラティウム、そして南伊の出身である。インノケンティウスはローマの支配にはさして関心を示していない。教皇はベトロの代理人というよりはむしろキリストの代理人なのであり、先ずもってキリスト教世界の諸君主の同意をとりつける必要があった。このような考えの延長上に十三世紀になると「教皇の居るところ、そこがローマである」(Ubi est papa, ibi est Roma) という標語が生まれてくるのである。<sup>(35)</sup>

ロタール三世がインノケンティウス二世の支持を性急に決断したのは彼の政治的失策であり、彼は帝権の強化のためにシスマを政治的駆引きの材料としてもっと活用すべきであったとかつてW・ベルンハルディは

主張した。<sup>(36)</sup> しかし当時のドイツには帝国教会体制に批判的な聖界諸侯(例えばザルツブルク大司教コンラート、マインツ大司教アダルベルト、そしてマグデブルク大司教ノルベルトなど)が少なからずおり、皇帝の一存で正統教皇を決定できる時代ではなくなっていた。ロタール三世自身はウォルムス協約にたいして批判的であり、叙任権の返還を再三教皇に要求した。例えばインノケンティウスとリエージュで会見したときに(一二三二年三月)、皇帝は司教指環と司教杖による叙任権の返還を教皇に求めている。「王国は教会への愛によってどれほど弱体化したことか、教皇への叙任権の返還が王国にどれほどの災いをもたらしたことか」と。このときに彼を諫めたのはクレルヴォー修道院長ベルナルであった。二年後にロタールの戴冠式がローマで挙行された折にも、式典終了直後に司教指環と司教杖による叙任権の返還をインノケンティウスにたいして要求した。皇帝を制止したのはマグデブルク大司教ノルベルトである。<sup>(38)</sup> ベルンハルディは、ロタールがアナクレトウス二世を支持したならば、皇帝のローマ支配ははるかに容易だったであろうと述べている。<sup>(39)</sup> しかし、そういうことになればおそらく対立教皇の擁立ということになって帝国は再び孤立化し、西欧社会を混乱に陥れたであろう。もはやハインリヒ三世、四世の時代に復帰することは許されない状況であった。皇帝といえども北イタリア、フランス、そしてドイツの聖職者が支持した教皇を承認し、支持せざるをえなかったのである。

枢機卿団内部の思想・イデオロギー的対立に批判的な立場をとるのがマレッツェクおよびロイターである。マレッツェクは尚書院長ハイメリクスの権力欲と枢機卿間の感情的・心理的対立を重視する。ハイメリクスがシスマのキーマンであったことは事実である。だが彼はおのれの権力欲を満たすためにひたすら権力を求めたわけではない。所属党派の政策からも明らかのように、教会改革の明確なヴィジョンとその実現への強い期待が、彼を行動に駆り立てたことを忘れてはなるまい。枢機卿団内部の「共感と反感、陰謀、友情、羨望、嫉妬」<sup>(40)</sup>はいつの時代にも存在するのであって、これがシスマの原因であったとは考えられない。さらにロイターはイデオロギーや改革プログラム上の差異ではなくて人脈形成にシスマの原因と支持動向を見出した。シスマに重要な役割を果たしたのは交友関係 *Freundkreise* であり、親疎の差であったという。たとえばルイ六世がインノケンティウス二世の支持に踏み切った背景には、北フランスの高位聖職者（ランス大司教ライナルド、サンルドニ修道院長シュジェール、そしてベルナルに代表される）のグループが控えており、彼らと北仏ではしばしば教会会議を開催した枢機卿特使（例えばアルバーノの司教枢機卿マタエウス）との交友関係を無視できないというのである<sup>(41)</sup>。しかしロイターも指摘しているように、上述のグループに属する司教たちは教区に設立した修道院を通常は新興教団（シトー会、プレモントレ会、アウグスティヌス派参事会）に寄進している<sup>(42)</sup>。これは明らかに

一つのプログラム上の立場である。むしろ思想・イデオロギー上の親近性をベースに人脈が形成されていたというべきであろう。

### 三 第二ラテラノ公会議

第二ラテラノ公会議は一一三九年四月三日に開会し、四月八日まで続いた。前年一月二十五日にアナクレトゥス二世が死去し、彼のあとを継いだヴィクトル四世（サンティ・アポーストリの司教枢機卿）はベルナルの説得によって同年五月二十九日に退位した。八年三ヶ月続いたシスマはここに終わったのである。注目すべきは公会議終了の翌日から早くも尚書院の活動が再開されたことだ。四月九日には三通、十日には二通、十一日には九通の教皇特許状が発給され、一ヶ月のあいだに七十通に近い特許状が交付されている<sup>(43)</sup>。出席者は帰国直前に教皇から特許状を取得するケースが多かったからである。司教参列者は百名を越え、出席者の総数は数百名にのぼった。レヴァントからも参加者があり、第一ラテラノ公会議以上に当会議は国際的な性格をおびていたといえよう<sup>(44)</sup>。公会議開催中にフルダ修道院長シュトゥルムの列聖式が催された。公会議の目的はシスマ後の教会の再建にあった。カノン第三十条はペトルス・レオニスとその一味の離教者によってなされた叙階は無効であると規定した。アナクレトゥス二世を支持した聖職者には厳しい処分が待っていた。



例えばペトルス・ピサヌス（サンタ・スザンナの司祭枢機卿）は、その法学の知識のゆえにウルバヌス二世のときから教皇庁でも著名な存在であった。ベルナルルの説得が功を奏してペトルスはアナクレトゥスの支持をとりやめたが（一一三七年）、インノケンティウスは彼にたいしても容赦せず、枢機卿会から追放した。ベルナルルはおのれの罪を認めた者に教皇が赦しを拒んだことを非難する手紙を書いている。<sup>(45)</sup> ペトルスの名声があまりにも大きかったので、ケレスティウス二世は彼を再び枢機卿会に復帰させた（一一四三年一〇月）。<sup>(46)</sup> 枢機卿会においてもシスマへの警戒心は根強く存続した。インノケンティウス二世のあとを襲ったケレスティウス二世、ルキウス二世、一人おいてアナスタシウス四世の三教皇はいずれもかつてインノケンティウス二世を支持した枢機卿グループの中から選ばれたのである。

公会議では三十条のカノンが制定された。<sup>(47)</sup> その大多数はシスマの間にインノケンティウス二世が主宰した教会会議で決議されたカノンであった。クレルモン（一一三〇年）、ランス（一一三二年）、ピアチェンツァ（一一三三年）、そしてピサ（一一三五年）の諸会議のカノンがそれである。とくに重要なのはクレルモン、ピサの両教会会議である。クレルモン会議で制定された十三条のカノンのすべてがラテラノ公会議のカノンとして再録された。ピサ会議からは六条のカノンが伝えられているが、そのすべてがラテラノ公会議のカノンに収録されている。<sup>(48)</sup> 教会改革に関

するカノンは第一ラテラノ公会議のカノンと部分的に重複する。シモニアの禁止（第一、二条）ニコライズムの禁止（第六、七条）がそれである。注目すべきはピサ教会会議のカノン第四条をほぼそのまま収録した第七条である。これによれば、副助祭以上の聖職者および誓願を立てた修道士、助修士、律修参事会員が教会の規律に反して結婚した場合には、当該結婚は無効であるとされた。叙階ならびに修道誓願は婚姻障害とみなされたのであり、聖職者独身制が明確に定まったのは、史上まさにこのときであった。<sup>(49)</sup> さらに俗人叙任の禁止を定めたカノンがある（第二十五條）。司教権の強化を策したカノンは第一ラテラノ公会議のカノンと

共通する。教区司教の懲戒権の優位を規定した第三条、聖職者の奇抜な服装や身なりに警告を発し、司教は風紀の監督責任者であると明記した第四条がある。聖職者遺産継承権の濫用を戒めた第五条はカルケドン公会議の第二十二条カノンの再確認といつてよい。俗人による十分の一税の所有禁止とその司教への返還を規定した第十条にはヒエラルヒー確立にたいする強い姿勢がみられる。神の休戦の実施責任者が司教であると明記した第十二条、教会法令の実施に責任を負うのは司教であると述べた第十九条がある。さらに司教選挙について規定した第二十八条は注目すべき規定である。<sup>(50)</sup> 司教の死後三ヶ月以上、司教座を空位にしてはならない。司教選挙権は司教座聖堂参事会員《*canonici de sede episcopali*》に属する。ただし司教選挙のときに教区の修道士《*religiosos vires*》の意向

を尊重しなくてはならない。司教には修道士の助言《*consilium*》を得て適任者が選出されるべきであり、彼らの同意と承諾なしの選挙は無効である。司教選出機関としての司教座聖堂参事会の地位が定まるのは当該カノンによってであるが、修道士の関与については次第に忘れられていった<sup>(51)</sup>。聖職者のモラルの改善について規定したカノンは少なくない。第九条は、修道士や律修参事会員が貪欲から世俗法を学んで法廷弁護人を引き受けたり、医学を修めることを禁じた。司牧への配慮がおろそかになるというのがその理由であった。第十六条は聖職と聖職禄の世襲を禁じた。聖職への就任は血統*sanguis*ではなくて功績 *meritum* によらねばならない。これと関連して第二十一条は司祭の息子を祭壇の務めから締め出した。しかし彼らが修道生活に入るのは差し支えない。聖香油、聖油の受取り、埋葬の認可が金銭の支払いと引換えになされてはならない（第二十四条）。また修道女が修道士、参事会員と一緒に聖歌隊に加わる<sup>(52)</sup>ことが禁止された（第二十七条）。

社会的規定もまた第一ラテラノ公会議に比べて増加した。非戦闘者の身体<sup>(53)</sup>の安全と財産保護の規定（第十一条）や、神の休戦の期間についての具体的な記述（第十二条）がみられる。水曜の日の入りから月曜の日の出まで、待降節から御公現の祝日までの八日間、五旬節主日から復活祭までがこれである。第十三条は高利貸付の禁止である。高利貸にたいしてはキリスト教徒としての埋葬が拒否される。アナクレトウス一門を

暗に非難したものとええよう。騎馬試合の禁止（第十四条）、教会および共同墓地のアジール権の確認（第十五条）、近親結婚の禁止（第十七条）<sup>(54)</sup>、社会的に大きな害悪をもたらし、住民を恐怖に陥れた放火（焼き払い）の禁止（第十八条）、弩や長弓などの残虐兵器の使用禁止（第二十九条）の規定がある。

司牧に関する規定が少なからずみられる。悔悛の秘跡の内面化を意図した規定（第二十二条）、十分な収入がある教会はすべて自身の司祭をもつべきであるとして雇われ司祭を締め出した第十条などがある。注目すべきは、教会の司牧の限界を示唆するカノンが登場することだ。一般信徒のあいだにキリストに倣って使徒的生活を實踐する者が現われたのである。第二十六条は、そうした風潮が女性たちのあいだにも広まっていた様を伝えている。彼女たちが「離れ屋や庵」《*propria receptacula et privata domicilia*》に移り住んで修道女に似た生活を送り、巡礼や旅客を接待するケースがそれである。これは「危険で嫌悪すべき習慣」《*pemicosam et detestabilem consuetudinem*》であるという。同カノンによれば、修道生活は聖ベネディクト、聖バシレイオス、そして聖アウグスティヌスのいずれかの戒律に従って共同生活を営むことであり、戒律に拠らない生活は「恥ずべき、いとわしい破廉恥な行為」《*inhonestum detestandumque flagitium*》なのである。教会は風紀を乱し、無秩序を助長するおそれのある信徒にたいしては厳しい態度で臨んだ。使徒的生活を實踐

する巡歴説教者の中からやがてサクラメントや司祭職を否定する異端者が現われた。第二十三条は、聖体の秘跡、幼児洗礼、品級、婚姻の絆を否定する異端者への警戒を呼びかけ、異端禁圧のために世俗権力の協力を要請している。当該カノンは二十年前のトゥルーズ教会会議で制定されたカノンの再録である。当時はピエール・ド・ブリュイの異端がカノン制定の直接的動機であったが、第二ラテラノ公会議の開催時にはアンリ・ド・ローザンヌが類似の異端を南フランスで広めていた。<sup>(33)</sup> アンリはすでにピサ教会会議で破門された。この兩人に対する最も厳しい批判者がクリュニー修道院長ピエールとクレルヴォー修道院長ベルナルドであったことを忘れるわけにはいかない。巡歴説教者の出現は共住修道制の指導者にとっては重大な脅威であった。巡歴説教運動の社会的背景やその意味を、ピエールもベルナルドもついに理解することができなかったといえよう。<sup>(34)</sup>

このような異端よりも当局がいつそう手を焼いたのは理想主義者の過激な説教である。その代表がブレーシア出身のアルナルド（一一〇〇年頃―一一五五年）であった。<sup>(35)</sup> 使徒的清貧の真摯な模倣者であった彼は教会が世俗的権力を行使することに強く反対した。ウォルター・マップによると、アルナルドは教皇庁に招かれたときに枢機卿たちの贅を尽くした食卓を見て教皇の面前でこれを難詰したために、彼らの怒りを買って追放されたという。<sup>(36)</sup> しかしローマの民衆の中には彼の説教にすすんで耳

をかす者が少なからずいた。アルナルドは教義上の異端とは無縁である。彼は以前にブレーシアの律修参事会員であり、また司祭であった。だがその過激な説教が災いして迫害を被り、各地を転々と放浪せざるをえなくなった。E・ギボンは啓蒙主義時代の偏見も手伝ってアルナルドが自由の鼓吹者であり、そのために処刑された殉教者であると述べて、その功績を高く評価した。<sup>(37)</sup> ブレーシア司教マンフレディは同市を混乱に陥れた責任者としてアルナルドを第二ラテラノ公会議に告発した。「教皇の許可なしにはブレーシアに戻らないという誓約を立てさせられた」<sup>(38)</sup> とベルナルドはその書簡で述べているが、もしもこれが事実ならば、アルナルドが第二ラテラノ公会議に出頭した可能性はある。アルナルドの出現は改革派の分裂を象徴する事件であった。アルナルド自身は貧しいイエスの弟子として、イエスの生き方に真剣に倣おうと努めた。粗衣を身にまとい、つねに断食を欠かさず、比類なき熱意をもって聖書の研究に精を出した。ソールズベリーのジョンやライヒェルスベルクのゲルホーのように、彼の主張を理解でき、それに共感を覚えた者がいた半面では、保守的改革者のベルナルドや攻撃の標的とされた教皇ならびに枢機卿がアルナルドに対して激しい憎悪を抱いたとしても不思議はない。ソールズベリーのジョンが言うように、アルナルドの主張はキリスト教徒が受け入れた法には叶っていたが、彼らがおくっていた生活からはかけ離れていたからである。<sup>(39)</sup>

#### 四 教皇改革の終焉

教皇首位権が確立し、ヒエラルヒーが整備されて中世カトリシズムの体制が整うのはインノケンティウス二世期であった。教皇庁への上訴が急増するのは実にインノケンティウス二世期以降である。教皇専決訴訟（免属特権・司教の任免・司教区の改変問題）に加えて、一般の修道士や参事会員からの上訴もまた増加した。免属特権を授与する際に、教皇が「介在者なしに」《*nullo mediane*》の定詞を好んで用いたことは、彼の普遍的裁判権者としての立場をよく示している。<sup>(60)</sup> シスマの終了後に新たなカノン法学が誕生した。矛盾する諸法令を理性の光りによって調和ある体系へと総合することだ。カマルドリ会修道士グラティアヌスが一一四〇年頃編纂した『矛盾教会法の調和集』（*Concordantia Discordantium Canonum*）（『グラティアヌス教令集』）はこのような時代の要請に応えたものである。本教令集には第二ラテラノ公会議までのカノンが収録された。司法業務の増加に伴い、法律に精通した枢機卿が必要になった。インノケンティウス二世とアナクレトゥス二世の決定的差異が司法化への対応にあったことをマレツェクもまた認めている。<sup>(61)</sup> 法学の学位をもつマガステル（*magister*）が枢機卿団の中に増加し始めるのはインノケンティウス二世のときであり、アレクサンデル三世期には任命された枢機卿のおよそ四分の一がマガステルの称号の所有者であった。

インノケンティウス二世期にローマの内外において教皇権は危機に直面する。第二ラテラノ公会議において、インノケンティウスはシチリアのルッジェーロを破門した。アナクレトゥス二世の同盟者として彼こそはシスマを長引かせた張本人だったからである。一一三七年八月、ロタール三世の南イタリア遠征の際に、インノケンティウスはアフリフェ伯ライヌルフスにたいして皇帝と共にアプリア公領を共同授封した。<sup>(62)</sup> インノケンティウスは彼の協力を得てルッジェーロを南イタリアから追放できると考えていた。だがライヌルフスは公会議終了直後に死去したので、インノケンティウスが同盟軍を率いることになった。一一三九年七月二十二日のガルツチオ（モンテカッシーノ近在）の戦いで同盟軍はルッジェーロの軍隊に敗れ、教皇は捕虜になった。インノケンティウスがあまりにもおのれの権威と実力を過信した報いである。三日後に教皇はルッジェーロに特許状を交付して彼の王号を承認した。シチリア王国、アプリア公領およびカプア侯領がルッジェーロの固有の領土とされた（ミニャーノ条約）。<sup>(63)</sup> ウォルムス協約以来の教皇庁の対ノルマン人政策の挫折である。これ以後も神聖ローマ皇帝との友好関係は存続したが、フリードリヒ一世の登位から四年後に締結されたベネヴェント条約（一一五六・六・一八）によって教皇権とノルマン人とのあいだに和解が成り、エウゲニウス三世とフリードリヒ一世とのあいだに結ばれたコンスタンツ条約（一一五三・三・二三）は事実上骨抜きにされた。枢機卿団内部においていわゆ

るシチリア派と皇帝派の対立が表面化するのとはこのときからである。

ローマ市にも危機的状況が生まれていた。インノケンティウスが死去する直前に、ローマ市民はカピトリノ丘に元老院を設立してコムーネを結成したのである（一一四三年九月）<sup>(64)</sup>。翌年には最も重要な教皇役人であるローマ都督（*praefectus Urbis*）が廃され、代りにパトリキウスが新設されてアナクレトゥス二世の甥にあたるヨルダヌスがこれに任命された。ローマは共和政体に移行した。ルキウス二世はルッジェーロが派遣した傭兵隊とコムーネに土地を奪われた貴族の不満分子の協力を得てコムーネを解散させようとした。教皇軍はカピトリノ丘の共和派の砦を攻囲したが、コムーネの軍隊によって撃退された。このときにルキウス二世は頭部に投石をうけ、この負傷が原因となつてまもなく死去した（一一四五・一一・一五）。ローマ市民の投石によつてルキウス二世が死去した事件は、改革教皇権がすでにその使命を果たし終えたことを象徴的に示している。改革にたいする教皇の意識が変化したことは、およそ一世紀続いた「二世」名教皇がここで断たれたことから明らかであろう。彼を継いだのはエウゲニウス三世である。彼もまたローマ奪回のため武力に訴えたが失敗に終わった。アルナルド・ダ・ブレーシアがローマに入つて元老院と同盟を結んだのはエウゲニウスの時代であつた。コムーネ運動と結びついたアルナルドはますます過激になり扇動的性格を強めていった。農民（*rusticana turba*）を支持基盤とする彼のコムーネ改造計画

はやがて皇帝、貴族階層の敵意を招き、アルナルドの没落を速めたのである。<sup>(65)</sup>

正統信仰の確立は教会の内外で種々の異端を誘発した。異端対策が第二ラテラノ公会議以後、教会の最重要テーマになる。正統信仰の擁護者として名を馳せたのはシトー会士である。とくにベルナルは最も熱心な異端の監視人であつた。一一四〇年六月のサンス教会会議では、アペラールに異端の嫌疑がかけられた。「彼（アペラール）が三位一体について語るときにはアリウスを想起させ、恩寵について語るときにはペラギウスを、またキリストのペルソナについて語るときにはネストリウスを想起させる」と。インノケンティウス二世は同年七月の勅書の中でアペラールとアルナルドの教説とともに異端として断罪し、「誤謬を含む書物」《*libros erroris eorum*》の焼却を命じた。<sup>(67)</sup> 焚書である。沈黙を命じられたアペラールは、クリュニー修道院長ビエールのもとでクリュニーの支院サン・マルセル・ド・シャロンの修道士として余生をおくつた。他方アルナルドは巡歴説教を続け、ヒエラルヒーとの対決姿勢を強めた。一一四八年三月にエウゲニウス三世が主宰したランス教会会議では、ブルターニュ出身の平信徒で巡歴説教者のエオン・ド・レトワールの異端が審理された。<sup>(68)</sup> エオンは断罪された後に監禁され、彼の忠実な弟子たちは焚刑に処されている。またポワティエ司教ジルベール・ド・ラ・ポッ

レーの神学理論がベルナルによって告発されたのもこのときである。これについてはソールズベリのジョンの詳細な報告が残されている<sup>(8)</sup>。ベルナルは会議の前にジルベールの著作から四つの章 *capitula* を選び出し、これに対する反論をしたためて数人の高位聖職者に同意を求めた。ベルナルの行動は枢機卿たちの怒りを買ひ、結局ジルベールは部分的な字句の修正を命じられたにとどまり公的断罪を免れたのである。同教会会議はまたカタリ派異端を初めて取り上げたことでも知られている。「何人もガスコーニュ、プロヴァンス、その他の地域に留まっている異端者とその追隨者を支援したり擁護してはならない」と。カタリ派異端については第三ラテラノ公会議のカノン第二十七条で詳しく扱われるが、すでにモンペリエ（一一六二年）、トゥール（一一六三年）の教会会議でも取り上げられた<sup>(7)</sup>。

カタリ派異端は十三世期に聖俗界の協力により武力によって平定される。このようなマニ教的異端にくらべてはるかに持続的で深刻な影響を後世に及ぼしたのは前述のアルナルド・ダ・ブレーシアの反聖職者主義的運動である。彼はフリードリヒ一世の軍隊によって捕らえられ、教会法廷で裁かれたのちに俗権の手に渡された<sup>(12)</sup>。絞首されてから火刑に処され、遺灰は死後崇められないようにテーヴェレ川に投棄された（一一五五年六月）。ベルガモ出身の一詩人がアルナルドの最期的情景を伝えている<sup>(13)</sup>。彼は死の瞬間まで自分の教えの正しさを確信していた。死の直前

に罪をキリストに告白するために暫しの猶予を与えられたが、司祭の立会いは拒否した。アルナルドが両手を上げ、唇を閉じて跪き、おのれの魂を神に委ねた姿を見て、処刑人すらも深い感動を覚えたという。アルナルドは言うなれば聖職者の良心の深部に突き刺さったとげであった。彼の肉体は滅びたが、使徒的清貧の理想は強く人々の心を揺さぶり続け、その追隨者や模倣者が跡を絶たなかった。彼らの中からアルナルド派、ワルドー派、そして十三世紀のフランシスコ会聖霊派の運動が生み出されてくるのである。

#### 省略記号表

- BPC* U Robert (éd.), *Bulletin du Pape Calixte II 1119-1124. Essai de restitution*. Paris 1891.
- CIC* A.Friedberg (ed.), *Corpus Iuris Canonici*. 2 vols. Leipzig 1879 (repr. Graz 1959).
- COD* J.Alberigo et al. (ed.), *Conciliorum Oecumenicorum Decreta*. Bologna 1973.
- HL* C.J.Hefele et H.Leclercq, *Histoire des conciles d'après les documents originaux*. 10 vols. Hildesheim/New York 1973 (Paris 1907-38).

- JL* P.Jaffé et S.Loewenfeld, *Regesta Pontificum Romanorum ab condita ecclesia ad annum post Christum natum MCXCVIII*. Leipzig 1885-88 (rep. Graz 1956).
- Mansi* J.D.Mansi (ed.), *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*. 31 vols. Firenze/Venezia 1759-93.
- MGH* *Monumenta Germaniae Historica*
- PL* J.-P.Migne (ed.), *Patrologia cursus completus.Series latina*. 221 vols. Paris 1844-64.
- SBO* J.Leclercq et H.M.Rochais (ed.), *Sancti Bernardi Opera*. 8 vols. Roma 1957-77.

# 注

- (1) *PL* 143, col.773.
- (2) *Ibid.*, col.1004.
- (3) *PL* 161, col.296;F.Dvornik, *Le schisme de Photius:histoire et légende* (Unam Sanctam 19). Paris 1950, 423-49.
- (4) *CIC* I, col. 45.
- (5) *COD* 442.
- (6) ラテラノ公会議については以下の研究を参照。P.Guérin, *Les conciles généraux et particuliers*. Bor-le-Duc 1872 (1866). t.II,317-

- 23; *HC* V-1,630-44; J.-R.Palanque et J.Chélini, *Petite Histoire des Grands Conciles*.Paris 1962,102-17; Ph.Hughes, *The Church in Crisis:A History of the General Councils:325-1870*. New York 182-221; A.Favale, *I concili ecumenici nella storia della Chiesa*. Torino 1962,122-34 ;R.Metz, *Histoire des Conciles*. Paris 1964,37-43; G.Fransen, "L'Ecclesiologie des Conciles médiévaux", dans: *Le Concile et les Conciles:Contribution à l'histoire de la vie conciliaire de l'Église*. Paris 1960,125-41;id., "Papes, Conciles Généraux et Oecuméniques", dans: *Le istituzioni ecclesiastiche della «societas christiana» dei secoli X-XI*. Atti della quinta Settimana internazionale di studio, Mendola, 26-31 agosto 1971, Milano 1974, 203-24. 以下は研究
- 発表 R.Foreville, *Lattin I, II, III et Lattin N*. Paris 1965. 以下は・イエティン (梅津尚志・出崎澄男訳) 『公会議史』南窓社、一九八六年、五〇頁以下。
- (7) F.-J.Schmale, "Systematisches zu den Konzilien des Reformpapsttums im 12.Jahrhundert", *Annuario Historiae Conciliorum* 6 (1974), 21-39; id., "Synodus-synodale concilium-concilium", *ibid.*, 8 (1976), 80-102; I.S.Robinson, *The Papacy 1073-1198 : Continuity and Innovation*. Cambridge 1990,121-45.
- (8) F.-J.Schmale, "Synodus...", *ibid.*, 98-102.

- (9) Id., "Systematisches...", *ibid.*, 37.
- (10) 史料とくいは Hessionis scholastici relatio de concilio Remensi (ed. W. Watterich), *MGH Libelli de lite Imperatorum et Pontificum* t. III, 21-28; M.Chibnall (ed. and transl.) *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*. Oxford 1978, Vol.6, 252-77; R.Foreville, *ibid.*, 35-43; O.Pontal, *Les conciles de la France capétienne jusqu'en 1215*. Paris 1995, 275-78; B.Schilling, *Guido von Vienne-Papst Calixt II.* Hannover 1998, 416-26.
- (11) M.Chibnall (ed. and transl.) *ibid.*, 268-75.
- (12) *Ibid.*, 272-73.
- (13) *BPC* n° 228.; *JL*, n° 6902; R.Foreville, *op.cit.*, 165.
- (14) 'Dimitte quod tue ministracionis non est, ut digne valeas ministrare quod tuum est. Obtimeat Aecclesia quod Christi est, habeat imperator quod suum est.'; *BPC* n° 278; *JL* n° 6950; R.Foreville, *op.cit.*, 166-67.
- (15) ドル大司教とその属司教に宛てた召集令状が伝えられている。この中で 'generale concilium' が二度言及されている。cf. *Ibid.*, n° 304; *JL* n° 6977; R.Foreville, *op.cit.*, 167.
- (16) *HL* 630-44; R.Foreville, *op.cit.*, 44-72; O.Pontal, *op.cit.*, 279; B.Schilling, *op.cit.*, 582-86. なお十一世紀末、十二世紀の教皇史を展望したものとして次の研究が重要である。A.Becker, "Das
- 12.Jahrhundert als Epoche der Papstgeschichte", in: E.-D.Hehl, H.Ringel und H.Seibert (Hg.), *Das Papsttum in der Welt des 12. Jahrhunderts* Stuttgart 2002, 293-323.
- (17) 'trecentorum aut amplius episcoporum'; Suger, *Vie de Louis VI le Gros*, éd. et trad. par H.Waquet. Paris 1964 (1929), 214-15. なお森洋訳編『サン・ドニ修道院長シユジュールイ六世伝、ルイ七世伝、定め書、献堂記、統治記』中央公論美術出版、二〇〇二年、一一二頁。
- (18) *Mansi* t.21, cols.296-97; R.Foreville, *op.cit.*, 172-3.
- (19) 一一三三年四月六日に、カリクストゥス二世は先の公会議での裁判手続を詳しく述べて、改めてピサ大司教のコルシカ教会にたいする特権を否定し、コルシカ教会の自由とその教皇直属を確認した。当文書には三十二名の枢機卿が副署した (*BPC* n° 389; *JL* n° 7056)。本件はホノリウス二世期に再び取り上げられ、一一二六年七月二十一日にコルシカの司教聖別権はピサ大司教に返還された。ピサ大司教の逆転勝利である
- (20) (*Mansi* t.21, cols.343-48; *JL* n° 7266)。
- (21) コルシカ北部の司教座 (Mariana, Nebio, Accia) にたいする裁治権はジュノヴァ大司教が所有した (*JL* n° 7613, 7620)。
- (21) *COD* 187-94; R.Foreville, *op.cit.*, 175-78.



- (22) ‘Nullus omnino archidiaconus aut archipresbyter sive praepositus vel decanus animarum curam vel praebendas ecclesia sine iudicio vel consensu episcopi alicui tribuat. Immo sicut sanctis canonibus constitutum est, animarum cura et rerum ecclesiasticarum dispensatio in episcopi iudicio et potestate permaneat. Si quis vero contra hoc facere aut potestatem quae ad episcopum pertinet sibi vindicare praesumpserit, ab ecclesiae liminibus arceatur’; *COD* 190.
- (23) ‘Sanctorum etiam patrum vestigiis inhaerentes, generali decreto sancimus, ut monachi propriis episcopis cum omni humilitate subiecti existant et eis uti magistris et ecclesiae Dei pastoribus debitam obedientiam et devotam in omnibus subiectionem exhibeant. Publicas missarum sollemnitates nusquam celebrent. A publicis etiam infirmorum visitationibus, inunctionibus seu etiam poenitentis, quod ad illorum nullatenus officium pertinet, sese omnino abstineant. In ecclesiis vero, quibus ministrare noscuntur, presbyteros nominis per manum sui episcopi habeant, qui ei de suscepta animarum cura respondeant’; *COD* 193.
- (24) M. Pacaut, *L'Ordre de Cluny* (909-1789), Paris 1986, 202.
- (25) I.S. Robinson, *op. cit.*, 381.
- (26) *Ibid.*, 382.
- (27) *Mansi* t.21, cols. 226-27.
- (28) 関口武彦「一二三〇年のシスマと枢機卿団」(佐藤伊久男・松本宣郎編『歴史における宗教と政治』南窓社、一九〇年、二四三―九〇頁)。
- (29) P. Classen, “Zur Geschichte Papst Anastasius IV.”, *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken* 48 (1968), 36-63; W. Maleczek, “Das Kardinalskollegium unter Innocenz II. und Anaktet II.” *Archivum Historiae Pontificiae* 19 (1981), 27-78; id., *Papst und Kardinalskolleg von 1191 bis 1216*. Wien 1984, 218ff.; T. Reuter, “Zur Anerkennung Papst Innocenz II.”, *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 39 (1983), 395-416.
- (30) I.S. Robinson, *op. cit.*, 73. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.
- (31) A. Keller, *Machtpolitik im Mittelalter-Das Schisma von 1130 und Lothar III.: Fakten und Forschungsaspekte*. Hamburg 2003, 25.
- (32) W. Bernhardt, *Lothar von Supplinburg*. Leipzig 1879, 339ff.; A. Keller, *op. cit.*, 34-39.

- (33) *JL* n° 8411; J. Deér (Hg.), *Das Papsttum und die süditalienischen Normannenstaaten 1053-1212* (Historische Texte/Mittelalter) 2. Göttingen 1969, 62-64.
- (34) E. Mühlbacher *Die streitige Papstwahl des Jahres 1130*. Darmstadt 1966 (Innsbruck 1876), 125.
- (35) M. Maccarrone, “*Ubi est papa, ibi est Roma*”, in: H. Mordek (Hg.), *Aus Kirche und Reich. Studien zu Theologie, Politik und Recht im Mittelalter*: Festschrift für F. Kempf, Sigmaringen 1983, 371-82; E.-D. Hehl, “Das Papsttum in der Welt des 12. Jahrhunderts. Einleitende Bemerkungen zu Anforderungen und Leistungen”, in: E.-D. Hehl, I. H. Ringel, und H. Seibert (Hg.), *op.cit.*, 9-23.
- (36) W. Bernhardt, *op.cit.*, 346f.
- (37) ‘in quantum regnum amore ecclesiarum attenuatum, investituram earum quanto sui dispendio reniserit’, O. v. Freising, *Chronik oder die Geschichte der zwei Staaten*. Darmstadt<sup>5</sup> 1990 (1960), 530-31.
- (38) R. Wilmans (Hg.), *Vita Norberti Archiepiscopi Magdeburgensis*, in: *MGH SS XL* Hannover 1856, 700-03.
- (39) W. Bernhardt, *op.cit.*, 347.
- (40) W. Maleczek, *Papst und Kardinalskolleg*... 222.
- (41) T. Reuter, *op.cit.*, 405ff.
- (42) *Ibid.*, 406.
- (43) *JL* n° 7966 (Apr. 9) -8031 (Apr. 30).
- (44) 第二ラテラノ公会議については以下を参照。 *HL* V-1, 721-46; R. Foreville, *op.cit.*, 73-95.
- (45) *SBO* VIII, *Epistola* n° 213 (a° 1139). これはベルナルがインノケンティウス二世に差し出した二番目の書簡である。最初の書簡にたいして教皇の返答がなかったので、再度書き送ったとベルナルは書簡の最後で述べている。ベルナルの要請にもかかわらず、教皇はペトルス・ピサヌスの処分を変えなかった。
- (46) ペトルスが枢機卿会に復帰したのはケレスティヌス二世期であり、特許状に副署した最初の日付は一一四三年十月十九日である。一一四四年二月二十四日まで合計九通の文書に副署している (cf. *PL* t.179, cols.765-809)。だがルキウス二世の発給文書にはペトルスは一度も副署していないので、彼の即位の前後にペトルスは死去したものである。
- (47) *COD* 197-203; R. Foreville, *op.cit.*, 187-94.
- (48) *Mansi* t.21, 437-40, 487-90.
- (49) M. Boelens, *Die Klerikere in der Gesetzgebung der Kirche. Eine rechtsgeschichtliche Untersuchung von den Anfängen der Kirche bis*

zum Jahre 1139. Paderborn 1968, 175-82. 関口武彦「聖職者独身制の形成―教皇改革の理解のために―」『歴史学研究』第七五四号(二〇〇一年) 一七一―三三頁。

- (50) ‘Obuentibus sane episcopis, quoniam ultra tres menses vacare ecclesiis prohibent patrum sanctiones, sub anathemate interdicimus, ne canonici de sede episcopali ab electione episcoporum excludant religiosos viros, sed eorum consilio honesta et idonea persona in episcopum eligatur. Quod si exclusis eisdem religiosis electio fuerit celebrata, quod absque eorum assensu et convenientia factum fuerit, irritum habeatur et vacuum.’: *COD* 203.

- (51) J. Gaudemet, “De l’élection à la nomination des évêques”, dans: id., *Église et Société en Occident au Moyen Age*. London 1984, Article XVII, 27.

- (52) 関口武彦「死質 (mort-gage) 契約考」『土地制度史学』第一七四号(二〇〇二年) 四一―四二頁。

- (53) M.L. Colish, “Peter of Bruys, Henry of Lausanne, and the façade of St.-Gilles”, *Traditio* 28 (1972), 451-60; C.N.L. Brooke, “Heresy and Religious Sentiment: 1000-1250”, *Bulletin of the Institute of Historical Research* 104 (1968), 115-31; R.B. Brooke, *The Coming of the Friars*. London 1975, 63-69; R.L. Moore, *The Birth of Popular Her-*

*esy*. London 1975, 33-38, 60-62.

- (54) 関口武彦「クリュニーと改革教皇権」『西洋史研究』新輯第二十五号(一九九六年) 一―三〇頁。

- (55) 前掲書, 二二―二六頁。アルナルドについては以下の文献を参照。A. Hauck, *Kirchengeschichte Deutschlands IV*, Leipzig 1903, 200-02; K. Hampe, “Zur Geschichte Arnolds von Brescia”, *Historische Zeitschrift* 130 (1924), 58-69; G. W. Greenaway, *Arnold of Brescia*. Cambridge 1931; R.B. Brooke, *op.cit.*, 69-71; R.L. Moore, *op.cit.*, 66-71. なおローマ市民のドイツ王宛の二通の書簡(一通はコンラート三世宛、もう一通はフリードリヒ一世宛)の英訳がムーアの前掲書六九―七一頁に収録されている。フリードリヒ宛の書簡では、執筆者ヴェルツェルはフリードリヒが皇帝冠を教皇からではなくて、ローマ元老院から受け取るように勧告している。このヴェルツェルがアルナルドその人ではないのかという意見は以前からある。アルナルド自身は著書を残さなかったが、彼の思想や行動についての証言は少なからず存在する。ベルナルの書簡(*SBO* VII, Epistola ff. 195, 196)および次の二書がアルナルドに言及している。Otto von Freising und Rahewin, *Die Taten Friedrichs* (Herausgegeben v. F.-J. Schmale). Übersetzt v. A. Schmidt: *Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters*, Band

- XVII, Darmstadt 1974 (1965), I-29 (S.182-83); II-30 (S.338-43); John of Salisbury, *Historia Pontificalis* (ed. and trsl. by M.Chibnall). Oxford 1986 (1965), 62-65.
- (56) W. Map, *De Nugis Curialium* (ed. and trsl. by M.R.James). Oxford 1983, 80-83.
- (57) E・ギボン（中野好之訳）『ローマ帝国衰亡史』筑摩書房、一九九三年、第六十九章、一八七頁。
- (58) ‘abjurare compulsus reversionem, nisi ad ipsius Apostolici permissionem.’: *SBO* VII, Epistola ff 195,60.
- (59) John of Salisbury *op.cit.*:64.
- (60) この定詞が最初に登場するのはインノケンティウス二世期の教皇文書 *インノケンティウス二世の教皇文書* 243-244。cf. I.S.Robinson, *op.cit.*, 234-35.
- (61) W.Maleczek, “Das Kardinalskollegium...”, *op.cit.*, 77; R.Sommerville “Pope Innocent II and the Study of Roman Law”, *Revue des études islamiques* 44 (1976), 105-114.
- (62) J.Deér (Hg), *op.cit.*, 77-67.
- (63) *Ibid.*, 71-76.
- (64) L.Halphen, *Études sur l'administration de Rome au Moyen Age* (751-1252). Roma 1972, 53-88; I.S.Robinson, *op.cit.*, 332; G.W.Greenaway *op.cit.*, 99-118.
- (59) G.W.Greenaway *op.cit.*, 119-46. cf. *JL* ff 9606.
- (60) ‘Cum de Trinitate loquitur, sapit Atrium; cum de gratia, sapit Pelagium; cum de persona Christi, sapit Nestorium’. *SBO* VII Epistola ff 192. 444 Epistola ff 187, 188, 189, 190, 191 (*ibid.*, 9-43) 243-244。この「異端」を糾弾したものである。
- (67) *Mansi* t.21, col.565.
- (68) *HL* V-1, 823 seq.
- (69) John of Salisbury, *op.cit.*, 15-38.
- (70) *Mansi* t.21, col.718.
- (71) *HL* V-2, 957, 971-72.
- (72) P.Munz, *Friedrich Barbarossa: A Study in Medieval Politics*. I-thaca/London 1969, 79-87; G.W.Greenaway *op.cit.*, 147-63.
- (73) G.W.Greenaway *op.cit.*, 218.

# Le premier concile et le deuxième concile du Latran

SEKIGUCHI Takehiko  
(Section d'Histoire, Faculté de Pédagogie)

第一、第二ラテラノ公会議  
—— 関口

Au cours de séance du 1<sup>er</sup> concile du Latran (1123), les pièces du traité de Worms furent présentées et lues à l'assemblée. Le concile approuva, d'une façon officielle, les termes du concordat de Worms. Nombreux sont les canons de Latran I qui visent à renforcer le pouvoir épiscopal (can.2, 4, 8, 16). Les articles très remarquables sont les canons 4 et 16. Le canon 4 déclare que toute charge d'âmes (*cura animarum*) et d'administration ecclésiastique (*rerum ecclesiasticarum dispensatio*) relève de l'évêque. Le canon 16 prescrit que les moines soient soumis en toute humilité à leurs propres évêques (*propriis episcopis subiecti*), et que dans les églises qu'ils desservent, ils ne peuvent instituer des prêtres, si ce n'est de la main de l'évêques (*per manum sui episcopi*). Ces textes mettent en quelque sorte un terme à un différend entre moines et évêques qui avait ressurgi au concile de Reims en 1119. Ces deux canons deviendront le principe fondamentale concernant la charge d'âmes (*Seelsorge*) de l'Église pendant tout le douzième siècle.

Le II<sup>e</sup> concile oecuménique du Latran (1139) s'occupa surtout de liquider le schisme d'Anaclet II. Diverses mesures destinées à lutter contre les abus de l'époque furent aussi approuvées par le concile. En fait, il ne s'agissait pas de dispositions nouvelles, mais de la confirmation de mesures déjà connues, concernant notamment le simonie, le concubinage des clercs, trêve de Dieu. Le canon le plus important est le canon 7. Il décrète nul tout mariage contracté par un clerc engagé dans les ordres sacrés. On ne saurait trop insister l'importance de cette mesure. La vacance des sièges épiscopaux ne doit pas excéder trois mois, et les chanoines ne sauraient exclure les religieux (*religiosus viros*) de l'élection (can.28). Quelques doctrines antisacramentaires et antisacerdotales furent condamnées, entre autres celles de Pierre de Bruys, Henri de Lausanne, et Arnaud de Brescia. Les pères de Latran II renouvelèrent en termes identiques la sentence fulminée à Toulouse (1119). Elle prescrit aux pouvoirs séculiers de sévir contre les hérétiques (*per potestates exteris coerceri praecipimus*) (can.23). La nouvelle époque de répression d'hérétiques (*haeretici*) a commencé.